かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 192 号

令和 5 年 8 月 31 日

編集　旭川医科大学
発行　学生支援課

「紫 陽 花」　（写真撮影：学生支援課）

病院長・副学長（医療、国際交流担当）に就任して
…… 病院長、副学長（医療、国際交流担当）東　信良 … 2

副学長（産学連携担当）並びに図書館長就任のご挨拶
…… 副学長（産学連携担当）、図書館長　藤谷　幹浩 … 4

教授就任のご挨拶
…… 麻酔・蘇生学講座 教授 牧野　洋 … 6

医大祭2023を終えて
…… 医大祭実行委員会委員長　川本　蓮也 … 8

医大祭写真集 …… 9

難病の体験談を通した看護学生の学び …… 11

旭川医科大学役員等紹介 …… 13

教員の異動 …… 14

病院長・副学長（医療、国際交流担当）に就任して

旭川医科大学
病院長、副学長（医療、国際交流担当）
東　　信　良

本年７月１日付けで病院長ならびに国際交流担当および医療担当副学長を拝命いたしました東　信良です。これまで国際担当病院長補佐４年間、安全担当副病院長を２年間そして経営担当副病院長を２年間務めてきて、病院職員の皆様の物凄い頑張りをよく見てまいりました。新型コロナウイルスによるパンデミックとの闘いで、特にこの３年間は大変な時期をともに過ごしてまいりました。我々の医療が試され、同時に国際交流も閉ざされましたが、この５月から我が国もポストコロナへと舵を切り、国際交流も医療も正常化に向けて歩みを進めたタイミングでの重要な使命を仰せつかったと考えており、身が引き締まる思いであります。

学会活動はオンラインから現地参加中心のスタイルとなり、国際学会での国際交流はほぼ回復し、同時に本学医師の海外留学も再開されております。学内においても長らくオンラインで行っていた学生の講義も対面に切り替わり、学内で海外からの見学者や留学生に遭遇する機会が増えています。

一方、病院においては、現在も入院患者全員の入院時PCR検査でまだまだ新型コロナ陽性者が出続けていることや市中において学童など若年世代で新型コロナによる学級・学校閉鎖が相次いでいることなどから、病院内はまだまだ完全な正常化には至っておりません。しかしながら、入院患者の面会制限や電話でのインフォームドコンセントという、いわば異常な状態から脱するべく、８月中旬より面会制限を緩和することといたしました。パンデミックによって制限されてきた患者中心の医療の推進がようやく本格的に再開されてきたところであります。

しかしながら、問題は山積しております。医療現場では、この３年超にわたる医療者の過酷な状況とともに若年人口の減少が相まって、医療者の担い手不足が深刻になっており、道内の多くの看護学校では入学者の定員割れが目立つようになってきておりますし、それ以外の職種においても働き手不足が深刻化しつつあります。医療は各職種が揃ってこそ成り立つものでありますので、特に地方においては働き手不足、成り手不足は大きな懸念材料であり、将来、少子化が進むほどに深刻になってゆくものと予想しております。

さらに、来年から適用される医師の働き方改革が、医師だけでなくあらゆる医療職種に大きくのし掛かります。医師の働き方改革を進めつつも、患者中心の医療を実現し医療の質を高めつつ、旭川医科大学病院が求められている役割を果たし続けるという非常に難しい課題に立ち向かわなければなりません。現在、多くの職員による超過勤務によって現行の医療が成り立っていますので、働き方改革実現、すなわち、一人一人の働く時間を短くするためには相当な改革が必要であることを意味しております。上述の使命を病院として全うするためには、医師の働き方の効率化だけでは限界がありますので、医師の仕事の一部を他の職種にシフトするタスクシフトや医療DX（デジタルトランスフォーメーション）さらには地域における病院間の役割分担などの全てを円滑に進める覚悟で臨んでいるところであります。働き方改革を実現するための改革を見える形で一つ一つ達成してゆき、職員が一丸となって魅力ある医療の実践が体現できれば、働き方改革が目指す本来の目的である「働く人の心身の健康」が達成され、魅力ある職場になってゆく好循環が生まれるでしょう。そのような改革を藤谷幹浩副病院長（外来・入退院担当)、大田哲生副病院長（多職種連携担当)、本間大副病院長（病院経営、医療機器担当)、松本成史副病院長、(事故防止担当)、原口眞紀子副病院長（安全問題、患者サービス、ボランティア担当)、田﨑嘉一病院長補佐（医療従事者教育担当)、牧野雄一病院長補佐（臨床研修担当)、木下学病院長補佐（臨床倫理担当）が構成する新病院執行部のメンバーを中心に進めてまいります。

「地域でも世界でも活躍できる医療人を育成する」という旭川医科大学や旭川医科大学病院の理念が達成できるよう、そして、医療人を目指す若者がこの地域で増え、あるいは医療人を目指す他地域の若者が旭川を目指してもらえるよう、皆様とともに全力を尽くしてまいりますので、何卒ご理解ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

副学長（産学連携担当）並びに図書館長就任のご挨拶

旭川医科大学
副学長（産学連携担当）、図書館長
藤　谷　幹　浩

この度、副学長（産学連携担当）および図書館長に就任いたしました藤谷幹浩と申します。よろしくお願いいたします。

私が担当する産学連携とは、企業などに代表される産業界を意味する「産」と大学などのアカデミアを意味する「学」が協力し合って、診療の現場で困っていることを解決するために「連携」する、という意味です。平たく言えば、大学での研究によって発見された新しい知見を、企業などのご支援のもとに実用化して、皆様の健康に寄与しようとする試みです。

例として、私が行っている産学連携をご紹介いたしましょう。消化器内科を専門とする私にとって、炎症性腸疾患という難病は大変やっかいなものです。この病気は比較的若年の方に発症し、腹痛、下痢、血便などの症状が一生涯続くことで著しく生活の質を落とし、かつ大腸がんなどの悪性腫瘍の発生頻度を上げてしまう原因不明の難病です。故　安倍元総理大臣がこの病気で２度退陣に追い込まれたのは有名な話です。私は炎症性腸疾患患者さんの診療を行っているうちに、腸管のバリアが障害されると腸の中の異物や微生物が腸を通して体の中に入り込み、炎症性腸疾患が悪化することに気づきました。しかし、腸管バリアを改善するお薬は存在しないため、自分自身で研究を進め長鎖ポリリン酸という物質が腸バリア機能を強く増強することを発見し、特許を取得しました。「学」としての発見です。その後、この発見を治療薬として患者さんのもとに届けるためには、様々な規則に則って開発を進める必要がありました。そこで、法律に詳しい企業や製薬に長けた企業、さらには資金提供を行う企業の協力によって大学発ベンチャー企業を設立いたしました。「産」からの支援です。さらに国からの資金提供もあり（「官」からの支援）、産学官の連携によって、この新薬開発プロジェクトが進行しています。このような経験を踏まえて、旭川医科大学で生まれた有望な発見を、産学（官）の連携によって実用化して行きたいと思います。そして、難病やがんなどの難治性疾患に苦しむ患者さんに福音となるような診断法や新薬、新規治療技術などの開発に向けて邁進したいと思います。また、このような産学連携を基盤とした実用化研究のノウハウを学生の皆様にも学んで頂けるように、卒前・卒後教育に関しても最大限努力していき

たいと思います。

　またこの度、図書館長にも就任させて頂きました。図書館は「知」の源であり、価値ある古書を含めた多くの書物を保管する場所でもあります。一方で、最新の知識を得るための“情報センター”としての機能も求められるようになりました。医学は日進月歩です。絶えず新しい発見があり、それが刻々と公表され続けています。常に最新情報を得ることで、患者さんに最先端医療を提供することができ、逆に情報の遅れは患者さんの予後を悪化させる要因にも成りかねません。旭川医科大学図書館はデジタル技術を最大限活用し、医師・医療スタッフが患者さんへ最新医療を提供し続けることをサポートしていきます。そして、この責務を全うすることで、患者さんの幸福に繋げていきたいと思います。また一方で、図書館は交流の場でもあります。教員と学生、先輩と後輩、地域の方と医療スタッフなど、様々なコミュニティーを繋ぐ役割を担っております。人と人との繋がりは、医療の現場において欠かせないものであり、個人の力を大きく増幅するものであると確信しています。学生の皆様に安心かつ信頼して使って頂けるような旭川医科大学図書館を目指して日々努力してまいります。今後ともご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

旭川医科大学
麻酔・蘇生学講座
教　授　牧　野　　洋

私は1993年に21期生として旭川医科大学に入学いたしました。在学中、下級生の頃には主にワンダーフォーゲル部・山岳部に所属して山に登り、３年生の時にカヌー部を作って川に遊びました。多くの素晴らしい仲間に恵まれたことは、現在にも活きていると感じています。卒業後は浜松医科大学麻酔・蘇生学講座に入局し、以降関連病院の麻酔科勤務を経て、2009年から２年間カリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）麻酔科橋本研究室に研究留学し、マウスを用いた新規脳動脈瘤モデルの開発と、それを利用した脳動脈瘤の発生および破裂予防法の研究を行ってまいりました。米国から帰国後は浜松医大の薬理学講座・脳神経外科学講座と共同研究グループを組むことで、多忙な臨床の中でも、留学先で行っていた研究を推進することが可能となりました。また、浜松という物づくりが盛んな街の特性を生かし、医工連携にも取り組んできました。教育においては麻酔・蘇生学に加え、医学史・麻酔科学史の研究・教育にも携わりました。浜松医科大学における医学史の全講義を担当し、また、神戸市で麻酔科学会が運営する麻酔博物館の展示企画・運営にも携わっています。

このように、旭川医大卒業後４半世紀を浜松で過ごしてまいりましたが、このたびご縁あって令和５年７月１日付けで、母校の麻酔・蘇生学講座の教授を拝命致しました。昭和51年に初代小川秀道教授により開講された当講座は、岩崎寛教授、国澤卓之教授と継承され、数多くの業績をあげ、優秀な臨床医を輩出してきました。伝統ある講座を継承していくことに身の引き締まる思いです。

1804年、華岡青洲により、世界最初となる記録に残る全身麻酔下手術が行われました。1846年にはボストンでエーテルを用いた全身麻酔の公開実験が行われ、世界中で全身麻酔が行われるようになりました。それまで、手術による痛みを恐れ死を選ぶ患者も稀ではなかったのですが、麻酔の登場により患者さんは痛みを感じずに手術を受けることが可能となりました。その後、麻酔を専門に行う麻酔科医が登場しますが、現代では麻酔科医の役割は、単に手術中に患者さんの意識を失わせることから大きく進歩し、出血や炎症など外科的な侵襲から生体を防御することに加え、急性・慢性痛を治療し（疼痛管理・ペインクリニック）、重症患者の管理を行い（集中治療）、悪性腫瘍に対応する（緩

和医療）などへと大きく広がっています。幅広い臨床ニーズに対応するために、麻酔科医には個々の臨床能力を高めることに加え、手術室スタッフとの密接なコミュニケーションをはかり、周術期管理全体を向上させる総合力を養うことが求められています。

大学病院の麻酔科にとって、麻酔科学の研究を推進し、医学・麻酔科学の発展に貢献できる人材を育成することも重要な責務です。多忙な臨床の中でも、本学の基礎研究系諸講座と共同して基礎研究を推進し、また、当講座で伝統的に行われてきた質の高い臨床研究を継承・発展することで、高いリサーチマインドを持った医師を育てていきたいと思っています。

北海道は札幌圏以外の医療過疎化が進行しています。地域医療に貢献することが当講座に求められた責務であると認識しておりますが、建学の理念にもある「国際的にも活躍できる医療人を育てていく」ことでも当講座の価値を高め、旭川医科大学の発展に貢献したいと考えています。

社会に目を転じると、現代は多様性の時代と言われています。麻酔科は早くから女性の活躍が顕著な科です。当講座においても、出産・子育てで負担の大きい女性医師にとって働きやすい環境の模索が続けられてきましたが、男性医師にとっても、今後は育児への参画や、親の介護などの負担が増えてまいります。また、2024年には医師の働き方改革も控えています。誰もが働きやすい職場環境を整えることが重要です。個々の麻酔科医が多様な個性を発揮し、自分の夢を実現できる環境作りをしたいと思っています。

今後とも、麻酔・蘇生学講座へご指導ご鞭撻を賜れますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

医大祭2023を終えて

医大祭実行委員会委員長　川　本　蓮　也

2023年6月10、11日の２日間で４年ぶりの開催となる医大祭を行いました。

テーマは「医軍奮闘（いぐんふんとう）」で、四字熟語の「孤軍奮闘」に因んだものですが、「医軍」は医師、看護師などはもちろん医療に関わる全ての人を指します。コロナ禍によって大変な日々が続く状況の中で、医療従事者の存在は今まで以上に必要とされる存在となっており、僕たち学生も含め、医療に関わる全ての人が一丸となってこの困難に立ち向かい、乗り越えようという意味を込めてこのテーマにしました。

医大祭当日は両日通して行われる医学展、学生団体による模擬店、食堂コンサートに加えて、１日目はフリーマーケット、落語家の立川談吉さん、経済学者の門倉貴史さんをそれぞれ講師としてお迎えした講演会、夜には学内のグラウンドで花火の打ち上げも行われました。

２日目は青空市、例年はなかった体育館でのロック研究会、CRANKをはじめとする部活によるバンド、ダンスなど様々なジャンルのステージ、本学の教授である山根由起子先生によるオーラルフレイルに関する公開講座が行われました。近隣住民の方々や大学の卒業生など２日間で非常にたくさんの来場者が訪れてくださり、無事成功を収めることができました。

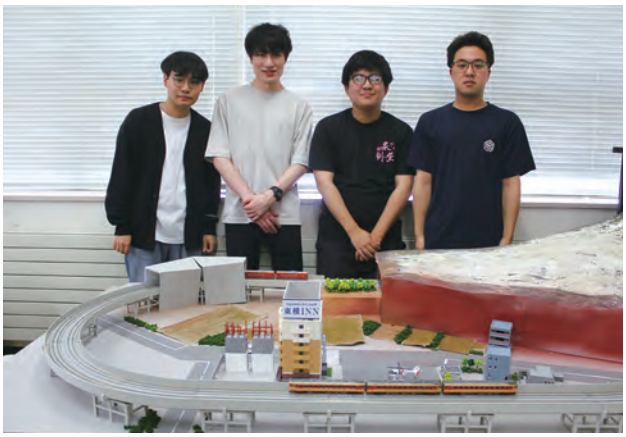
学祭期間中、普段は学生や職員しかいない校内を小さい子から年配の方々まで多くの来場者が歩き回って模擬店や様々な企画を楽しんでいる様子は実行委員長としてここまで頑張ってよかったなと思わせてくれるような光景でした。

コロナ禍ということもあり、四年生以下は初めての医大祭だったので知らないことだらけでしたが、みんなが意欲的に準備など活動してくれたおかげで無事に終えることができました。準備や運営に関わってくださった学生、学校職員の皆様に心より感謝申し上げます。

大成功を収めたといっても過言ではない今年の医大祭でしたが、これをきっかけに来年度以降ももっと色々な人が楽しめる医大祭が続いていけばと思います。

医大祭写真集

医大祭写真集



難病の体験談を通した看護学生の学び

― 旭川医科大学医学部看護学科3年生60名「保健医療福祉システム論」―

令和5年6月30日(金)北海道難病連旭川支部脊髄小脳変性症・多系統萎縮症患者家族会「**であい友の会**」の皆様にご協力いただき、**4年ぶりの対面授業**を行いました。

難病の経過の特徴や悩み

＜難病の特徴＞

・ふらつきなど歩行時の動作や呂律が回らなくなるなど話し方に異変が見られ、家族など周囲に受診を勧められ受診した方が多く、徐々に進行するため発症時期が明確でない。

・薬は病気の進行を抑えるが、特効薬がないため、治験への望みや薬の開発を期待している。

＜診断前後の状況＞

・病名の確定までに数年の時間がかかり、異なる疾患の診断を受けることも多々ある。
・疾患名がなかなかわからなかったことから、診断されたことに安堵感があった。
・難病は一生治ることがなく、本人・家族が告知を受けるときには精神的ショックが大きい。

＜生活の中での悩み＞

・明確な治療法がないまま長い闘病生活になる。定年前に発症した場合、収入面で悩みを抱える。
・動けなくなることより、話せなくなることの方が辛いという方もいる。
・段々と進行していく病状を理解していても、できることができなくなっていく辛さがある。

＜疾患の受け止め＞

・脊髄小脳変性症は比較的ゆっくり進行し、病気の受け止めが自身のタイミングでゆっくりできる一方、多系統萎縮症は発病から進行が早く、心の整理が追い付かないまま進行する。
・疾患を受け止めた後も、患者は自分の身体が思い通りに動かせなくなることなど症状に関する苦痛や、家族など周りの人に介護してもらうことへの申し訳なさなどを感じる。
・子や孫にも遺伝する可能性への申し訳なさで胸が詰まり苦しい気持ちになるのだと思った。
・患者会というコミュニティや悩みを相談できる人が近くにいない場合、孤立してしまう。

難病とともに生きる

＜病気とのつきあい方＞

・病気の進行を遅らせ、今できることを維持するために、できることは自分でする、たくさん歩くなどのリハビリを行い生活している。

・肺炎など他の病気にかからないよう、本人・家族が一緒に考え、工夫しながら生活している。
・診断を受けた当初は一人で抱え込んでいたが、家族と病気をだんだん受容していき、今は自分が幸せだと感じるようになっている。ここまでには否認と受容を何度も繰り返してきた。
・難病になって不便なことはあるが、不幸ではないと自らの生き方を家族に示している。
・本人自身は難病を前向きに捉え、工夫を凝らしながら楽しく生きているのに、自分を見た他人からの不憫に思う視線や言動がとても不愉快に感じることを学んだ。
・スーパーでの買い物など日常生活で周りが気遣って手伝ってくれることが、自分の身体が思うように動かないためにかえって迷惑になる場合もある。自分のペースでできる方がよいこともある。
・苦しい時は一緒に苦しみ、共感し、患者・家族を安心させられるような温かい笑顔で接したり、大丈夫だよと言って肩を触れたりするなど周りの支援が生きる力になる。

家族からの学び

・家族は「本人が頑張っているから協力する」と自宅を車椅子用に建て替えたり、買い物や病院の送迎など介護に協力的で、患者の頑張る意思が家族にも伝わり介護を頑張れる力になる。
・家族は本人が辛そうな様子を間近で見ることも辛いが、最も辛いのは本人で、ずっと悲しんでいる訳にはいかないからこそ辛くても明るく振舞うなどどのように支えていけば良いのかも悩むのではないか。
・デイサービスに本人を送り出す中で「介護が嫌になり施設に送ると思われるのではないかと寂しくて不安だった」との話から、家族も様々な場面で葛藤や不安を抱えていることわかった。
・本人ができないことを補うため、腰につけて転倒防止するベルトや、血圧測定・レントゲンがしやすいチャックが袖口から開けられる服など介護用品を工夫して、家族が前向きに支えている。
・人生を共に歩み支え合ってきた家族だからこそ、最期まで楽しく過ごそうと一緒にいる時間が増えたというお話から、互いを思いやる夫婦の関係はかけがえのないものと感じた。

患者会の存在

・「同じ病気というだけで分かり合えることがある」という言葉から、病気を受容できたとしても心の中には言葉にできない思いがあり、患者会はそのような思いに互いに寄り添う場である。
・病気や生活の中の困りごとの共有、生活のヒントをもらえることが支えになる。
・遺伝性の疾患では自身や子どもの発症への不安があったが、患者会で語ることで少し安心できた。
・患者会で病気に対する考え方や制度などの情報交換を行い、良いところは取り入れている。
・家族が亡くなった後も疾患に興味があり、患者会の活動を継続しているお話から、患者会が家族にとって、家族の死を受容する過程でも大きな役割を果たしているのではないか。
・コロナの影響で対面が難しかった時はLINEやZoomで離れていても仲間とつながっている心強さがあった。コロナ禍で交流が薄れていたが対面で会えるようになった今が活動を活性化させるタイミングだと学んだ。
・難病を持つ人としての活動を誰かに伝えることも生きるための力となっている。

☆将来の看護の担い手として・・・

・病気の治療も重要だが、本人や家族の思いを傾聴し、辛さを分かった上で、その人は何ができて何をすることが難しいのかを理解しその人の力を最大限に活用して生活の工夫をともに考える支援が求められる。
・確かな技術を持ち、常に患者と家族に寄り添う気持ちを忘れないようにしていきたいと強く感じた。
・患者会の情報提供を行い、人と人とのつながりを絶やさない(孤立させない)ことを大切にしたい。
・難病は稀で知られていないため、周囲の観察や遺伝性の可能性など受診のきっかけとなる普及啓発が必要。
・家族は本人が他界した後に辛く苦しい日々を送ることを学び、残された家族のケアも重要な役割と感じた。
・訪れる毎日や自分の環境・関係に感謝しながらこれからの日々を進んでいこうという気持ちになった。実際の体験談を聴くことができ、とても貴重な体験となりました。ありがとうございました。

旭川医科大学役員等紹介

令和５年７月１日付けの役員等は、下記のとおりとなりましたのでお知らせします。

職　　名	氏　名
学　　長	西　川　祐　司
理事、副学長（財務、医師の働き方改革担当）	古　川　博　之
理事、副学長（教育、人事・組織、評価担当）	奥　村　利　勝
理事（社会連携担当）（非常勤）	辻　　泰　弘
理事（地域医療担当）（非常勤）	佐　古　和　廣
副学長（研究、入試担当）	川　辺　淳　一
副学長（医療、国際交流担当）	東　　信　良
副学長（産学連携担当）	藤　谷　幹　浩
医学部医学科長	奥　村　利　勝
医学部看護学科長	升　田　由美子
大学院博士課程医学専攻長	川　辺　淳　一
大学院修士課程看護学専攻長	藤　井　智　子
学長補佐（ＩＲ担当）	松　本　成　史
学長補佐（広報担当）	本　間　　大
図書館長	藤　谷　幹　浩
病 院 長	東　　信　良
副病院長（外来・入退院担当）	藤　谷　幹　浩
副病院長（多職種連携担当）	大　田　哲　生
副病院長（病院経営、医療機器担当）	本　間　　大
副病院長（事故防止担当）	松　本　成　史
副病院長（安全問題、患者サービス、ボランティア担当）	原　口　眞紀子
病院長補佐（医療従事者教育担当）	田　﨑　嘉　一
病院長補佐（臨床研修担当）	牧　野　雄　一
病院長補佐（臨床倫理担当）	木　下　　学
監　　事（業務）	鈴　木　義　幸
監　　事（会計）	桶　　利　光

教員の異動

令和5年5月31日	辞職	インスティテューショナル・リサーチ室	講師	大関智史
令和5年6月1日	配置換	インスティテューショナル・リサーチ室	講師	井上裕靖
令和5年6月30日	辞職	医学部看護学講座	教授	阿部修子
令和5年6月30日	辞職	医学部麻酔・蘇生学講座	准教授	神田浩嗣
令和5年6月30日	辞職	医学部麻酔・蘇生学講座	講師	神田恵
令和5年7月1日	採用	麻酔・蘇生学講座	教授	牧野洋
令和5年7月31日	辞職	医学部眼科学講座	准教授	宋勇錫
令和5年8月1日	採用	医学部病理学講座（腫瘍病理分野）	教授	髙澤啓
令和5年8月10日	改組による配置換	医学部形成・再建外科学講座	教授	林利彦